



(昭和24年生)

## 歌と写真で綴る薩摩の脇道 — 歌三昧の史跡巡礼, その1 —

高田病院 粟 博志・高田 昌実・萩原 隆二  
 鹿児島大学 名誉教授 納 光弘  
 加治木温泉病院 夏越 祥次  
 県立大島病院 粟 隆志

『一日に七たび色が変わるといふ桜島の姿を、寅刻に仰ぐのは今日が初めてで、そしておそらく、これが最後になるであろうと篤姫は思いつつ、老女の幾島いくしまに手を取られて庭を下りた。

ときに嘉永六年八月二十一日、……

二の丸から発した行列は、お角櫓すみやくらの下を  
 通って楼門を出、道を東へ取って吉野橋を渡った。……』

宮尾登美子の名著、小説『天璋院篤姫』  
 (以下『天璋院』と略す)の「出立」の冒頭断片である。

この小説を読むと、時代背景、歴史考証の精確さと、心理描写が素晴らしく、近年の小説では出色の作品である事が感じられる。

それに比し、私共はこの地に50年以上も住んでいるが、史跡について、さほど知らない事に気付いた。最近新造なった楼門は分るとしても、お角櫓はピンとこない。

そこで郷土の史跡を訪ねたいと思うようになった。

然し単なる史跡の紹介では、今まで刊行された多くの作品に及ばない事は明らかである。ここでは、歌や句を交えて、情景を味わいながら、何回かに分けて史跡を巡りたいと思う。同じ場所を訪れても、季節により、時刻により、受けるその印象が全く異なる事は、言うまでもない。

なお作歌、作句に関しては、万葉、古今、新古今、西行、芭蕉、良寛らの規範に習った。そして文法に囚われず、感性に従い音読に

耐えるよう心掛け、新旧仮名使いを混在し用いた。

その目指すところは、日本古来の美意識、即ち無常観に立脚した「もののあはれ」を表現する事にある。史跡は、鶴丸城周囲、鶴丸城内、鶴丸城周辺、城山、そして市内に拡大するよう努めたが、必ずしもそうでない所もある。第一章では、新年を祝し年賀の歌も入れた。

### [第一章：鶴丸城址周囲、堀と城壁]

図1は、明治5年の鶴丸城の写真である。これは案内板から撮らせてもらったが、原本は黎明館蔵(玉里島津家資料)である。ここに限らず、各史跡には詳細な案内板があり、十分な情報を得る事ができる。関係者の方々に感謝したい。

中央に、楼門があり、左端が『天璋院』にててくる御角櫓である。右側が武器類を保管



▲ 明治5(1872)年の鹿児島(鶴丸)城  
 図1 鶴丸城全景  
 (城址案内板より、黎明館蔵の玉里島津家資料)



▲ 明治5(1872)年撮影の御角櫓  
 図2 鶴丸城の御角櫓  
 (城址案内板より、黎明館蔵の玉里島津家資料)



図3 城壁の前に内堀の蓮、背後に城山、左端に天皇行幸碑。城壁の上端が城内の位置。

していた、御兵具所である。城の背後の城山の景観は、今と変わらない。

図2は御角櫓である。城山がすぐ背後に迫っているのがよく分る。

曾て芭蕉は、旅と独自の俳諧の道を目指した。

- ・この道や行く人なしに秋の暮 (芭蕉)

その後、蕪村は、門から出る事により俳諧の道を目ざした。

- ・門を出れば 我も行人秋の暮 (蕪村)

今、宗博は鶴丸城址に立ち、心のままに歌う。ここに立てば、季節は巡り、時の流れの旅ができる。

- 1 城跡しろあとに立てば行く人 秋の暮
- 2 城跡に 立てば季節は駆け巡る

[1] 鶴丸城址の一日、四季、そして新年の訪れ

図3は、城壁と内堀の蓮である。左の石碑は、明治5年の天皇行幸碑である。その左に御角櫓があった。背後の城山の形は昔と変わっていない(図1と比較)。

図4は、城山の麗である。ここから深い森になり、比較的急峻な城山となる。城山は自



図4 鶴丸城内背後の麗。ここから左の深い森になり、城山に連なる。

然の作った山城である。

鶴丸城址に立つと、50年前に私共が過した医学部を偲ぶものは、堀と石垣、堀に咲く蓮、背後に迫る城山の森、それに新造なった御楼門に並んで遠望される、雄大な桜島と青空のみである。思えば遠くに来たものである。

- ・世上せじょうの栄枯は雲よの変態 五十餘年よねんは一夢いちむの内 (良寛)

- 3 昨日さくじつの積りつもて遠き 五十年
- 4 隼人はやひとの薩摩さつまの城を 雲居くもいなす遠くもわれは 今来いまきつる鶴かも

- 5 城跡は 形見に何を残すらむ 桜はすはな 蓮花  
池辺のもみじ
- 6 世の中を常なきものここに知る 鶴丸  
の城 移らふ見れば

つ三つ 我もいつしか薩摩人さつまびと  
一人たたずむ遊子かな  
秋風寒し城の跡 昭和は遠く去りにけり  
年年歳歳季節は巡り げにやこの世は  
定めなく また新しき年ぞ来にけり

図5は、黎明館から見た御楼門である。左手に煙をたなびかせる桜島が遠望できる。門からは雲が、四方に、わき上っているように見える。雄大な信じ難い景観である。

- 7 東の山に煙のたなびきて 返り見すれば  
森深みたり (人麻呂風に)
- 8 青垣の鶴丸の城やまから たふとく 山柄し貴あらし 蓮柄はすから  
し清けくあらしあめつち 天地と長く久しく万代よろずよ  
に 変わらずあらむ永久にとこしえ
- 9 夢の世に 夢をまた見し人の世は いづ  
れ現か いづれが夢か  
春されば 堀辺に花の咲きををり 落  
花の雪に戯れり  
夏されば しじに木の葉の繁れれば  
蝉鳴く声ぞ響めけり  
秋されば 池のもみじば水に浮き 山  
も錦の衣着て 夕されば 島も染まりぬ  
浅葱色 山も染まりぬ茜色 鳥も塹へ二

[2] 桜島を望み、新年を寿ぐ歌

冷たい風が吹く早朝、桜島を望むと、雲間より吉兆の黄金色の光が、地上に降りそいでいる。何とも神神しい。新年が私共にとっても、鹿児島市医師会員の皆様方にとっても、また事務局員の皆様、御家族様にとっても、吉き年でありますように祈念して。

- 10 わたつみの 豊旗雲に朝日さし 御光に  
かすむ桜島山とよはたくも ここう

刻一刻と移り変わる情景を楽しんでいると、彩雲の中より一羽の大鳥が現われ、こちらに



図5 黎明館から見た御楼門。城門から四方に雲が立ち昇り、左の桜島から煙がたなびく。



図6 雲間より御光が地上に降りそそぐ。



図7 彩雲より大鳥が現われ、舞い上がる。



図8 朝日をあび山体が黄金色に輝く。

近づいてきて、大空高く舞いあがった。

11 <sup>あらた</sup>新しき 年の初めに舞う鳥は 神の使い  
か <sup>さち</sup>幸多かれと

12 舞いあがれ <sup>あした</sup>早朝の光 身にあびて 高  
く <sup>あした</sup>高く明日をめざし

桜島全体が朝日を浴びて、光り輝やいている。七変化する桜島は、いつ見ても、いつの世にも雄大である。

13 朝日あび <sup>こがね</sup>山体黄金に輝けり <sup>あらた</sup>新しき年  
いや <sup>よごと</sup>重げ吉事

14 いつの世も <sup>お お</sup>まこと雄雄しく <sup>くす</sup>奇しくも  
<sup>お</sup>神さび居る賀 <sup>か</sup>火を噴く山ぞ

[3] 年 男

市医師会より年男の連絡が来て、ああそうだと気付いた。小さい頃から習字を習っていたが、正月になると、小学一年の書き初めを思い出す。題は「はつはる」であった。

この日ばかりは、大きい筆で書くので、上紙はたっぷり墨を吸う。母親が隣で懸命に墨をすってくれた。

15 はつはるや 墨の香りのなつかしさ

16 初春の また巡りきて年男

17 年男 めでたくもあり 十里塚

18 初日の出 命なりけり年男

19 何にても まずは嬉しき年男

私は今振り返ってみると、よくここまで生きてこられたと思う。

鹿児島に来て、よかったと思う人生を送りたいと思う所である。

[4] 鶴丸城の鶴と、御楼門の松にちなみ、医師会の皆様の長寿を寿ぐ歌

COVID-19は、殊に長寿者に厳しいとも言われる。皆様と共に私共も元気に頑張りたいと思う。

20 <sup>ちとせ</sup>鶴亀も千歳の <sup>いのち</sup>生命ありければ <sup>きみ</sup>君が <sup>よわい</sup>齢更に有らなむ

21 <sup>ちとせ</sup>千歳まで 松にぞ君を祝い鶴 <sup>よわい</sup>その齢まで生きむと思えば

[5] 島津氏概略と鶴丸城（鹿児島城）

氏祖島津忠久は、鎌倉幕府初代征夷大將軍、源頼朝より1185年、島津莊地頭職に任命される。その後、薩摩、大隅、日向の守護職となり、南北町、室町、戦国、安土桃山時代を通じ大大名としての地位を維持した。

1600（慶長5）年の関ヶ原の戦いでは、義弘は西軍に属したが、決死の敵中突破の末、薩摩に生還した。

当主家久と義久は、義弘を擁護しつつ、徳川勢と対決姿勢を貫きつつ、一方で講和を図り、徳川家康より所領を安堵され、幕藩体制下に公称77万石の大大名として、影響力を明治維新の廃藩置県、1871（明治4）年まで発揮

した。このような姿勢は、生麦事件や薩英戦争後の対処方法にも貫かれている。

鹿児島城（鶴丸城）は江戸時代、初代藩主となった家久により、1601年、四神相応の地、つまり東の精木川、西の出水筋、南の錦江湾、北の城山として選ばれ、1604（慶長9）年に完成する。

この城は平山城で、城山の麗の屋形（本丸、二ノ丸ほか）には石垣は築かれたが、天守や高い城壁は築かれなかった。

私見であるが、図3に見られるように、城内は城壁の上端近くの高さにある。

築城に際しては、この高さまで盛土がなされたものと思われる。その土は多分、現存するL字型の内堀と、現在は埋め立てられた、外側の南北2本の外堀の土が利用されたと推察される。

#### [6] 御楼門、内堀と城壁

図9は、新造なった御楼門である。

一見さほどの大きさには見えないが、図10に見られるように、高さ、幅共に約20m、奥行7mの二重二層の、日本屈指の大きさの城門である。

大棟にはあおむね鯨しやちが載っている。また上層の屋根には、隈鬼瓦も置かれている。

それらと同じものが、黎明館の入口にも展示されている。



図9 新造なった御楼門。

1872（明治5）年、明治天皇の鹿児島行幸に際しては、天皇が西郷隆盛らと石橋を渡り、楼門を通り、鶴丸城に入城した。

1873（明治6）年、御楼門は焼失し、2020（令和2）年、147年ぶりに再建された。



図10 御楼門は近づくると、その大きさを実感できる。棟には一対の鯨鯨。



図11 黎明館に展示されている鯨鯨。



図12 黎明館に展示されている鬼瓦。

御楼門橋は、木造橋が1810（文化7）年、石橋に架けかえられた。約200年前である。

城壁の弾痕は、1877（明治10）年の、西南戦争での壮烈な戦いでの、政府軍の攻撃の跡である。

鯨しやちは空想上の魚で、虎（竜ともいう）の頭を持ち、胴体は魚、背にはとげが生え、口から水を噴き、火を消すという。

鯨鉾しやちぼこの尾びれは常に上を向き、倒立した状態で屋根の棟の両端に置かれ、木造の大建築物を火事から守る、火除ひよけの守り神である。

御楼門を見上げると、鯨が青空の海を、波しぶきをあげ、はねて泳いでいるようである。

22 堀のしゃち 飛び上ってぞ 屋根のしゃち

23 鯨しやちほこの 堀より出でて屋根の上

24 青空に しゃちの泳いで 御楼門

御門は、二度焼失している。今度こそ永遠に門と城を守ってほしい（平穩，平和であってほしい）。

25 青海せいかいに 波しぶきあげ泳ぐしゃち 祈りよとどけ 城を守れと

26 御楼門 しゃちも眺める錦江湾

27 錦江湾 飛んできたるか 城のしゃち

28 鯨鉾しやちぼこが 高見の見物 桜島

29 飛び跳ねて 蓮をみおろす屋根のしゃち

新造なった御楼門の奥に隠された感があるが、その大門の後ろには、西南戦争の激戦を物語る石垣が残されている。



図13 御楼門の背後の城壁の弾の痕。その背後は黎明館の屋根。

30 新しき 門の奥なる弾の跡

31 西南いぐさの戦を語る 石の壁

32 むざんやな 城の石垣 弾のあと

33 大門の奥なる石垣 夢のあと

しかし、その石垣の前の堀には、清すがしく蓮の花が咲き、蓮葉が何ごとも無かったかのように、夏の日差しを浴びて茂り、心を和らげてくれる。

34 のどけきや 堀の石垣 堀の蓮

35 昔みし 御堀の蓮を今日見れば いよよ清さやけくなりにけるかも

36 夏の日に 蓮葉に宿る白露を 取らむと思ひ 触れなば散りぬ

37 蓮の露 風に吹かれて 堀の水

38 宝石の 流れて落ちて ただの水

遠い昔、城主はもとより、天皇も西郷までもが、この石橋を渡り、入城した華やかな一

瞬もあった。しかし今、西南の役で戦った人々を蓮の花でとむらってほしい。

夏も終わりに近づき、秋風が吹いてくると、蓮の勢いもやがて劣えてくる。

でもまた来年も、その次の年も、ずっと咲いてほしい。いや必ず咲けと思わずにはいられない。

39 過ぎし日を いざとむらえよ 蓮の花

40 命とて 水をたのむに難<sup>かた</sup>ければ 物わびしらに 咲く堀の華

41 風に落ち 水と消へにし蓮の露 西南のこと夢のまたゆめ (秀吉風に)

42 きのうちこそ 夏の盛りの蓮の花 いつの間にもやら 秋風ぞ吹く

43 石垣の砲弾の傷 秋の風

44 秋深し 蓮も枯れたり 夢のあと

45 来る年も 咲かまほしけれ堀の蓮

46 とこしえに 清<sup>すが</sup>しくぞ咲け 蓮の花

47 石垣に蓮の花をば奉<sup>たてまつ</sup>れ この後の世に人たずぬれば (西行風に)

[7] 御楼門の石橋の前の松に寄せて

石橋の前の松はまだ若い。然し蓮のない季節にも、青青として千年の翠<sup>みどり</sup>を保つだろう。

48 まだ青き 堀辺の松は年経れど 雨<sup>あめ</sup>風に耐え 色かわるまじ

49 門<sup>もん</sup>前の 道なる松の若<sup>もも</sup>けれど 百代<sup>よ</sup>をまつの深き色かな

[8] 隅<sup>すみ</sup>欠と北門石橋と堀辺の花

堀に沿って、右手方向に進むと、西郷の私学校跡である。その手前の堀がL字形に曲る所で、城壁の角がへこんでいるのに気付く。

隅<sup>すみ</sup>欠と呼ばれ、鬼門に当る北東の石垣の角を、意図的に欠けさせている。災い除けである。

堀に沿って城山の方に進むと、正面に薩摩義士の碑が見える。その手前に北門のもう一つの小さな石橋がある。私共の学生時代は、この橋を渡り、医学部構内に入っていた。現在、堀に沿って城址内に桜が植えられている。

昔、西行の時代には、吉野は十数万本の桜が咲き乱れていたと言う。

・雪にまがふ花の盛りを思わせて かつがつ霞むみ吉野の山 (西行)

しかし堀辺の石垣の花の風情は、それにもまして興味深い。数を誇る必要はない。

50 西行に劣るまじきぞ 堀の花

51 未<sup>いま</sup>だ見ず 堀にしだるる桜花 吉野にまされり 春の夕暮

52 何にても 花の命は短かれど その趣<sup>おもひき</sup>ぞ古来変はらず



図14 城壁の北東の角の隈欠。歩道の先は、薩摩義士の碑。その手前の小さい橋が北門の橋。その奥に城山が迫る。



図15 2004年4月5日の北門の石橋。桜の背後から夕陽がさし込み、桜花が夕日にきらめく絶景。橋の石段と堀の水面に花嵐が舞う。



図16 夏草の庭園跡。茂る夏草は地上の塵芥を覆い尽くす。

53 花散らす 風はいとどにくけれど 風に  
誘はれ 香ぞ匂ひける

54 夕されば 見ても俣ばむ桜花 吹きな散  
らしそ 堀辺ふくかぜ

55 桜花 盛なりけり ぬばたまの今宵逢ふ  
人みな美しき (晶子風に)

56 山風に心安くぞまかせつる 堀の桜の春  
の夕暮

57 小夜ふけて 堀に山風吹きぬれば 水面  
にさくら降りつもるらし

58 花嵐 散りぬる桜 水に浮き やがて筏  
になりにけるかも

59 桜花 早く散りぬると思えども 人の姿  
ぞ 風に移らふ

御楼門の方に目をやると、腰まで伸びた夏草が生茂っていた。

この日、人影はまばらであった。

茂る夏草は、地上のものを全て覆い包み、なぜか昔日を想い起させる。

『三代の栄耀一睡の中にして……<sup>さて</sup>諸も義臣すぐって此城にこもり 功名一時の叢となる 国破れて山河あり 城春にして草青みたり 夏草や兵どもが夢の跡 (芭蕉)』

1189 (文治5) 年、奥州藤原氏の平泉、<sup>たか</sup>高館で自刃した源義経らの儚さを、正に500年後、1689 (元禄2) 年、この地を訪れた芭蕉の人口に膾炙した句である。

私は、この情景を、この地での1877年の西郷と重ね合わさずには、いられない。

良寛も夏草に思いを込めた。

・夏草の茂りに茂るわが宿は、かりにだにやも訪ふ人はなし (良寛)

60 おぼつかな 夏草なんの故あれば すすろに昔 なつかしかるらむ

私は、あたりを見渡し、城址内を一周したが、医学部、また4年間いそしんだ医学部茶道部の部室の名残りを示すものは皆無であっ

[第二章：鶴丸城内の史跡]

[1] 庭園跡

令和2年8月16日、黎明館を訪れた。美術展をみるためである。暑い日であった。館から一步日向にでると、そこは灼熱の世界であった。



た。現在では、黎明館と県立図書館が、県民のニーズに応え、立派にその機能をはたしているが、一抹の寂しさも感じずにはいらなかった。

61 夏草や 昭和は遠くなりけり

62 夏草や 我が学舎は <sup>まなびや</sup> ありやなしや

63 草深し わが学び舎はいずこにありや

64 世の中は 何か常なる城の跡 きのうの  
まなびや きょうのれいめい

65 草深し 昔なつかし学舎も <sup>まなびや</sup> 今は絶えて  
<sup>あどす</sup> ぞ訪れもせず

## [2] 島津重豪

江戸時代を通じ「島津に暗君なし」と言われる。経済問題は別として、第8代藩主・重豪<sup>しげ</sup>（1745-1833年）は、最も多くの業績を残した一人である。

1771（明和8）年、参勤交代の江戸からの帰路、長崎出島を訪れ、オランダ船の見学を行い、歴代の商館長とも親交を深めた。

重豪は海外の情報、文化に強い関心を示すと共に、いわゆる蘭癖大名の一人として、1773（安永2）年、現在の中央公園あたりに、藩学を興すため藩校造士館を、翌年には武芸稽古場として、その隣に演武館を設立し、藩士の文武教養の場とした。

また、明時館（天門館）を設立し、天文学、暦学の研究を行い、薩摩暦の精度向上を図った。安永3年には、医療技術の育成のため造士館の南隣りに医学院を設立。吉野などに薬園を造り「質問本草」の刊行など、学問を奨励した。

1826（文政9）年、曾孫の<sup>なりあきら</sup>斉彬らを供に、大森でオランダ商館長ステュルルの江戸参府



図17 従三位島津重豪公頌徳碑。垣根の後ろは城壁と内堀。御楼門の隣にある。



図18 蘭癖大名・重豪の宝物庫、聚珍寶庫の由来を示した碑。蘇鉄の群生の前に移転されたもの。

一行を出迎え、同行のシーボルトと会見。オランダ語を一部交えて会話し、鳥の剥製方法を伝授されたという。

三女<sup>ただ</sup>寔子・茂姫は第11代將軍・家齊<sup>いえなり</sup>に嫁し（御台所、落飾し広大院）、重豪は將軍の岳父として、高輪下馬將軍と称され、江戸でも権勢を振った。

さて黎明館から御楼門を正面にみて、その右に、従三位島津重豪公頌徳碑が建っている。1942（昭和17）年の建立である。大きい碑であるが、注意してみる人は少ない。

黎明館正面入口前に、蘇鉄の群生と共に、もっと目に付きやすい碑がある。

1827（文政10）年に重豪が高輪藩邸内に、宝石、古代の印章、瓦、陶磁器など、長年心



図19 重豪公の代に創作された「春駒」と斉彬公の代に創作された「軽かん」。

を込めて収集した品が、散逸しないようにとの目的で建てた宝物庫、聚珍寶庫しゅうしんぼうこの由来を記した碑で、平成12年に移転された。

どうか散逸させることなく、永遠に保持してほしい、とあるが、今どうなっているのかは不明である。

多分、これらの宝物は散逸したと思われる。然し、重豪の時代のもので今でも残っているものがある。多くの人知っているだろう。

それは「春駒」である。言うまでもなく駒は馬の意で、「若々しい馬」となる。

宝暦13年、重豪公の代に、高橋八郎種美は、餅菓子を作り、西田町の西田座での歌舞伎上演時に販売し、好評を得たという。

色、形から「うまんまら」と呼ばれていたそうである。素朴な時代であった。

その後、久光公が「そんな呼称は女性の前では、好ましくないから、春駒と呼ぶように」との事で、春駒と呼ばれるようになったとの事である（天保洞あるじ 双山記参）

重豪の大切な珍宝は散逸したと思われるが、春駒は庶民の味として、広く親しまれている。

茶席で菓子を食べ、茶を服すれば、自然と笑みもこぼれるが、春駒の話をするれば、更に座も和むことだろう。淑女という言葉が死語になって久しい。

66 茶菓子たべ 茶を服すれば 笑顔かな

67 茶の席で 春駒たべる淑女かな

68 春駒の由来を語る 座はなごむ

### [3] 天璋院篤姫

第11代藩主・斉彬は、1809（文化6）年、江戸薩摩藩邸で生まれ、曾祖父重豪の影響を受けて育った江戸末期の名君で、富国強兵、殖産興業を行い、また西郷隆盛らの人材を育成した。斉彬が初めて薩摩に入ったのは、家督を継ぎ藩主になった43歳、1851（嘉永4）年5月の事である。

5月15日、一門四家の家族一同を城中に招いた。今和泉島津家・忠綱の娘、敬子すみこはこの時、16歳。広い大奥書院から長い廊下を幾曲りして、能舞台の隣りの控えの間で、斉彬と敬子は、初めての言葉をかわす。

「座右の書を挙げよ」「...白氏文集...10歳の折から日本外史の講義を受けました...」等の会話があった。

二年後の嘉永6年、敬子は従兄の斉彬と親子固めの盃のやりとりを行った。

その年、江戸藩邸に入る。そして第11代將軍・家斉の御台所広大院の入興時の名前とくひめ・篤姫にちなみ、敬子は篤姫となった。

1856（安政3）年11月11日、藩邸の書院で、斉彬と親子別れの盃ごとを執り行った後、篤姫は江戸城に入城した。

婚儀は12月18日に行われ、篤姫は第13代將軍・家定の御台所となった。（『天璋院』参考）

然し結婚生活は、わずか1年9カ月で終わった。家定が急死したからである。その後、篤姫は二度と鹿児島鹿児島の地を踏む事はなかった。

第14代將軍・家茂の御台所（家茂死後、落飾し静寛院）となった皇女和宮と共に、その波乱に満ちた激動の人生は衆知の通りである。その雄雄しく生き抜いた人生の中で、寄せて



図20 天璋院篤姫座像。50年位前、こちら辺は医学部講堂があった。その右手前には、パラ園があった。



図21 昭和47年5月14日(1972)、茶道部の第10回端午の記念茶会。

は返す波のように、生まれ育った桜島を、しくしく(繰り返す、繰り返す)夢にみたのかもかもしれない。

69 夢のみに 雄雄しく見えたる桜島 よする白波しくしく思ほゆ

70 この世をば 夢かうつつか知らねども  
はかなきものに ありにけるかも

御楼門を通り、石段を登りつめた右手に石畳が広がっている。そこに天璋院の座像がある。2010(平成22)年、NHK大河ドラマ「篤姫」が放送された年に建立された。

座像後壁の裏面に碑文がある。

『私事一命にかけ是非是非御頼申候に候』  
『...討幕軍の先頭に立っているのは実家の薩摩藩であり、その参謀は西郷隆盛であった。...天璋院が、戊辰戦争の際、徳川家の存続を願い、官軍隊長に宛てた嘆願書の一節である。』

以前、ここ黎明館で篤姫展が開かれ、多数の遺品が展示された。豪華な着物や家具・調度品には、さほど興味は持てなかったが、最

も関心を持ったのは、多数の手紙であった。

長文に残された筆跡、字くばり、文章の流れから、これが二十歳代の女性の筆になるものとは、とても信じられず、一見しただけで篤姫の傑出した才気と素養に、驚嘆したのを今でも鮮明に覚えている。漢文が好きだった私も、昔、白氏文集選集は、愛読書の一つだった。

私の学生時代、このあたりに講堂があり、この中で毎年、医学部茶道部の端午の茶会が催されていた。

図21は、昭和47年5月14日(1972)の十周年記念茶会の時のものである。中村宗照先生が心配そう(?)にながめている(見守っている)のが印象的である。

篤姫座像は、丁度この点前座のあたりではないかと推測される。(篤姫、斉彬の対面の121年後)。

[4] 鶴丸城庭園跡、御角櫓、明治天皇行幸記念碑

御楼門をはさんで、篤姫像と反対側に庭園跡がある。1872(明治5)年、明治天皇が鹿児島を行幸された。その際の城内の写真から、奥書院、池、滝、立石などの姿が確認できる(案内板に写真あり)。

庭園に隣接し、内堀に面した南端(館の南



図22 鶴丸城庭園跡。秋には草は刈りとられ、整然としている。右端中央に天皇行幸碑がみられる。



図24 天皇行幸記念碑。当時の天皇の威光が偲ばれる。



図23 御角櫓の基礎の一部、そのむこうに天皇行幸碑。更にもうその後方に御楼門。左手には黎明館、右手の垣根のむこうは堀。夏草を刈ったあとにクローバーの群生が現われる。

東角) に御角櫓おすみやぐらの基礎の一部が残されている(図2参照)。1853(嘉永6)年6月15日に、篤姫と典姫(斉彬の娘)は、ここから、今に続く祇園祭を見物したとの記録が残っているという。

### 71 篤姫のぎおん祭をながめたる 御角櫓はいま草の中

暑い夏には、草が生い茂っていたが、秋にはきれいに刈りとられ、整った庭園が広がっていた事を、つけ加えておく。自然の力、夏

草の生命力の強さを実感させられる。

御角櫓の隣に、1872(明治5)年の明治天皇行幸記念碑が建っている。大きい碑である。明治45年、松方正義の揮毫により建立された。(この頃、粟の家系から一人目が鹿児島で学んだ。七高造士館第一部医科志望、明治41年入学、44年卒業。第8回卒業の粟篤吉とくきち、九大医、開業医内科と名簿にある。私が鹿児島に行くか迷っている時に、鹿児島は良い所だ、私は馬車で鹿児島に入った、と背中を押してくれた。その時もらった田能村竹田遺愛の神農像は、今も私を見守ってくれている。鹿児島に来たのは、私が3人目である)。

行幸に随行し、鶴丸城に入城した時が、西郷の絶頂期だったかもしれない。

### 72 西郷のほまれの跡も草の中

ここで『天璋院』から若干の引用を許してもらおう。歴史好きの方に、ぜひ一読をおすすめする。

『ペリー再航の報に接して警戒を厳にしたとき、供の中に身の丈五尺九寸、体重二十九貫という巨漢…。斉彬は、ほど経て西郷吉兵衛を庭方役に登用した。四月上旬の夜半、斉彬は西郷を召してその初仕事を申しつけ

た。篤姫入輿の準備にのり出したもので...  
その一切の調達をいいつけたのであった。」

かつて、斉彬と初めて対面した篤姫、かつて篤姫の婚礼道具を調達した西郷、運命の歯車が一つでもかみ合わなければ（御楼門は、明治6年焼失、令和2年再建）、篤姫も西郷も、そして私達も石橋を渡り、御楼門を通り抜け、そして鶴丸城内に入る事は、叶わなかったかもしれない。

私達が御楼門を通り抜けられるのは、147年ぶりなのである。

73 篤姫も 西郷もまた渡りけり 我もわたりぬ石の橋 命なりけり 鶴丸の城 御楼門

[5] 御楼門再建前の鶴丸城の城壁

さて、新造なった御楼門は、次第に周囲の景観になじんできており、今も昔も天守のない鶴丸城のシンボルであろう。

ただ正直に言えば、現時点では、この雄大、豪壮な御楼門は私にとって、威圧感の方が強い。現在七高造士館時代の門柱に、新門が造られつつある。



図25 2004年7月11日、御楼門も案内板もベンチ、照明など何もない。橋を渡り、曲がった坂道を登ると、そこが城内、古城の風情。古城には和服姿がよく似合う。

歴史を再現する事は、訪れる者にとってはよい事とは思われるが、今の私には、時の流れが門に染み込めば、素直に受け入れられる時がくるだろうと思う所である。

なにしろ、門の再現はこれがはじめてではないし、何はともあれ、門が忠実に再現された事は幸いである。再建に尽力された関係者の方々に感謝したい。

第二章の最後に、御楼門再建前の鶴丸城の城壁の姿を提示した。私は、昔、この石橋を渡り、両側を石垣に囲まれた階段を歩くのが楽しかった。曲がりくねった階段は、つかの間のタイムスリップの旅の途中を感じたものであった。図25は、16年前のものである。

なお一部の写真に協力頂いたのは、鹿児島大学医学部歯学部茶道部を、故中村宗照先生の遺志を引き継ぎ、過去20年間（手伝い期間も含めれば30年間）、指導されている裏千家流茶道家、学校茶道教授者、小牧宗代先生である。史跡には、着物姿がよく似合う。御協力に感謝する。

74 御楼門<sup>あ</sup> 在りても無くとも 城の跡  
時の流れにながされて 姿かたちは 変  
れども 心の奥<sup>おも</sup>の想い変らず

75 さくら舞い 桜ふみけり 我<sup>わ</sup>が十九の春  
(宗博)